

同人の著作か未考。

七六、尹文操老子簡要義五卷 佚

兩唐志玄景先生老子道德簡要義五卷をのす、同じ書であらう、舊唐志に尹文操撰太上老君玄元皇帝聖紀十卷をのす。

七七、韋錄注老子兼義四卷 佚

杜光庭によると韋錄字は處玄だといふ、韋處玄には又西昇經の注二卷があり新唐志にのつて、道藏本碧虛子集注の内に收められて居る。

七八、王玄辯老子河上公釋義十卷 佚

杜光庭廣聖義に見ゆ、新唐志に王玄古莊子集解二十卷をのす、王玄辯と同じであるか否やを知らぬ。

七九、尹愔老子新義十五卷 佚

尹愔は秦州天水の人、新唐書二百卷に傳がある。傳によると愔は初め道士であつたが玄宗の朝特に道士の服を着しながら諫議大夫集賢院學兼修國史となり、開元末に死んだ人、その老子注は杜光庭廣聖義に出てゐる。

八〇、徐邈注老子四卷 佚

徐邈の傳は晉書九十一に見えてゐる。邈には五經音の著作のあること本傳に見えてゐて、老子の注に言及してゐないが、釋文叙錄によると莊子徐邈音三卷をのせてゐるから、老子にも音注があつたのであらう。

八一、何思遠老子指趣二卷、玄示八卷 佚

何思遠の事跡未考。

八二、薛季昌老子金繩十卷事數一卷 佚

杜光庭によると薛季昌は衡嶽の道士。

八三、王綬老子注二卷、玄珠三卷、口訣二卷 佚

杜光庭に見ゆ。

八四、法師趙堅老子講疏六卷

杜光庭に見ゆ。

八五、楊上善道德集注真言二十卷 佚

杜光庭いふ、楊上善は唐高祖時の人、官太子司議郎、兩唐志は楊上善注を二卷となし、別に道德指略論二卷略論三卷を出す。

八六、賈至老子述義十一卷金鈕一卷 佚

兩唐志日本見在書目錄に賈大隱老子述義十卷をのす、賈至は即大隱であらう。大隱は周禮義疏儀禮義疏の著者賈公彥の子で、禮部侍郎にまでなつた人、其父公彥の周禮義疏中に、老子河上公注を引いて居る點から想像すると、大隱の述義は河上公注を推演したものであらうと思はれる。而して具平親王の弘決外典鈔に、賈大隱の老子述義六條が引かれてゐるが、此を熟讀すると亦河上公義の敷衍である。瀧川君山先生の所藏にかゝる舊鈔河上公本老子の初に、賈大隱の述義を引いて、「述云凡五千三百二言、道經二千三百八十二字、德經二千九百二十字也」とあつて其經本の總字數をあげてゐる。

八七、車弼老子疏七卷

佚

張君相集注には車惠弼として引かれてゐたらしいが、杜光庭は道士車弼といつてゐる。

八八、李榮注老子二卷

殘缺

此書は杜光庭と宋志とに見えてゐて杜光庭は任眞子李榮注と題してゐる。李榮の傳記は詳細なことは知らぬ。佛祖統紀顯慶三年の條に沙門義褒、道士黃頤等が宮中に談論したとき、道士李榮が本際義を立てたこと、同四年の條に李榮が道生萬物義をたて僧慧立に詰難せられたことを記し、佛道論衡丁に其問答を録し、又顯慶五年に李榮が僧靜泰と化胡問題を議論してゐること及び龍朔二年に李榮が靈辯と問難したことをのせてゐるから、李榮は大體高祖の世の人である

ことが判る。又杜光庭によると李榮は任眞子と號したこと、又續高僧傳義褒傳によると東明觀の道士であつたことが判る。其老子注は杜光庭も宋志も二卷としてあるが、現に道藏絲字號に李榮注の殘卷があつて四卷としてゐる。それから又道藏の使字號可字號覆字號に涉つて強思齊の道德眞經玄徳纂疏二十卷があるが、その中に李榮注が收められて居る。吾友石濱學士の言によると巴里の敦煌本中にも李榮の注の斷簡があるといふ、此等を以て李榮注の大略は知られる。

八九、黎元興老子注義四卷

佚

杜光庭によると黎元興は成都の道士だといふ。

九〇、王光庭契源老子注二卷

佚

九一、張惠超老子志玄疏四卷

佚

宋志には張惠超の道德經志玄疏は三卷と成つてゐる。

九二、龔法師老子集解四卷

佚

九三、通義觀道士任太玄老子注二卷

佚

九四、道士冲虚先生殿中監申甫老子疏五卷

佚

九五、張君相老子集解四卷

或作八卷

佚

晁公武によると張君相は蜀郡岷山の道士で天寶以後の人らしく、其集解八卷は河上公、嚴遵、

王弼、何晏、郭象、鍾會、孫登、羊祜、羅什、盧裕、劉仁會、顧歡、陶隱居、松靈仙人、裴處恩、杜弼、節解、張憑、張嗣、臧玄靜、大孟、小孟、竇略、宋文明、褚粲、劉進喜、蔡子晃、成玄英、車惠弼等の注をあつめ三十家集解と呼んでゐるが、其列名は二十九家である。是れ恐らく君相自身を一家と勘定したのであらうといふ。此書宋志にも著録されてゐるが今は傳はらぬ。清儒阮元は道藏信字號道德眞經注疏が即是であるといふが疑はしい。(四庫未收書目)

九六、道德眞經注疏

藏本

此本は道藏信字號中の書で阮元が張君相集解だといつたところのものである。此書の卷首には顧歡述と署名してあつて、畢沅王昶嚴可均諸人は顧歡本として引用してゐるが、其中に唐人の注が羅列されてゐて、南齊の顧歡の著述とは考へられぬ。此書中引用された注は張君相の所云二十九家中鍾會、羊祜、劉仁會、陶宏景、大孟、竇略、宋文明、褚粲、劉進喜の九家を缺き、單に張云とあるのは張憑か張嗣か將た別の張氏かも知れぬ。大體張君相引據の名を存するやうであるが、其外に開元注疏、李榮、陳某の説をも引いてゐて別人の集注であるらしい。(此事吾友石濱純太郎君の考證がある。支那學第一卷第十一號及東洋學報十五卷四號)然し其内容張君相集解と似た所が多いから此に列した。

九七、蔡子老晃子注

佚

蔡子晃は續高僧傳慧淨傳、佛道論衡丙に見えた紀國寺の慧淨と談論した蔡晃であらう、從て蔡晃は高祖の時代の道士で劉進喜と略同時の人である。

九八、成玄英注老子道德注二卷

佚

同老子開題序訣義疏七卷宋志

佚

新唐志によると、成玄英字は子實、陝州の人で東海に隱居し貞觀五年に召し出されて京師に至り、永徵中郁州に流され老子莊子の疏を作つたことが知られ、佛道論衡丙卷には貞觀廿一年勅して玄昇と諸道士と力を合せて老子を梵文に翻譯せしめられた事をのせてゐるが、その時玄昇と事を共にすべく勅命あつた道士の主なる人は蔡晃と成英とであつた、蔡晃は即蔡子晃で成英は成玄英であらう。具平親王の弘訣外典鈔に莊子成疏を引くに成英疏としてゐる、是れ成玄英が古くから成英とも呼ばれた證である。從つて成玄英は蔡子晃と同時でやゝ後輩に屬したのであらう。成玄英の老子注は舊唐志に注二卷をあげ新唐志と宋志とは注二卷と開題序訣疏七卷とをのせてゐるが、杜光庭はたゞ講疏六卷をのせてゐる。之につき吾友石濱純太郎君は「成玄英にはもと注と疏とありしか或は注は疏を誤傳せるものであるかも知れぬ、而して開題序訣疏は老子經文の疏は五卷で開題と序訣の疏二卷であるらしく、杜光庭の六卷本は開題と序訣との疏を合せて一卷、之に本文の疏五卷を合せて六卷とあげたのであらう」といひ、ペリオ目錄二五

一七の老子德道經義疏卷五殘卷（即羅氏景印鳴沙石室古籍叢殘中の贊道德經義疏）が成疎であることを強思齊の玄德纂疏中に引かれた成疏に因つて立證し、其末が五卷で終つてゐることによつて本文の疏が五卷であることを斷定し、又玄德纂疏と杜光庭の廣聖義とによつて、成玄英には開題と序訣疏とのあつたことを證明して居られる（東洋學報十五卷四號敦煌古書雜考）。今成玄英の注二卷と開題と序訣疏とは佚して傳はらぬが、本文の疏五卷は強思齊の玄德纂疏から摘出して敦煌古鈔成疏殘卷の形式に従つて改寫せば完全に唐の舊式に還すことが出来る。

九九、唐玄宗注老子道德經二卷 存

一〇〇、同 道德經疏六卷 存

唐の玄宗が老子の注を完了したのは開元廿年で（易州開元碑による、杜光庭は十一年とし封演聞見記は廿一年明皇親注老子道德經、令學者習之といふか、舊唐書によると廿一年正月制令士庶、家藏老子一本云々とあるから、廿一年は御注頒布の年で杜氏の十一年は廿一年の誤字であらう）翌年正月士庶人の家に老子を藏すること、毎年の貢舉に老子を加ふることを勅令し、帝躬ら經注を書して石に刻し長安左街興唐觀右街金仙觀に立て、廿三年道門威儀司馬秀等の奏請によつて諸州の節度刺史に令し各地龍興觀、開元觀の形勝の地に石臺を立て京様に模して御注を刻立せしめた。此等石臺中、懷州龍興觀に立てられたものは歐陽修趙明誠の著録に上つて居

り、邢州龍興觀に立てられたのは明の歸震川が見たといひ、易州開元觀のは今も直隸易州の龍興觀門外にある。易州の本は開元廿六年十月時の刺史田仁畹が勅を奉じて建てたもので其書者は蘇靈芝であらうといはれてゐる。此幢はもと城西開元觀にあつたが宋の乾道五年に張孝祥といふ人之を府治に移したと天下輿地碑記に記し、又同治十二年張烈文が今の地に移すと上谷訪碑記に説いて居るなど思ひ合すと、屢々移建されたもので文字の缺けた點もあるが、大體完全に保存されて居て、その缺けた部分を道藏男字號の玄宗注本で補へば、先づ玄宗手定本に近いテキストを得ることが能きる。又巴里の敦煌本中には經文を朱書し注を墨書した玄宗注本の殘卷があるときく。玄宗は其後また疏六卷を製して其注を敷演したと杜光庭はいつてゐるが、王應麟玉海五十三に集賢注記を引いて「開元二十年九月、左常侍崔沔入院修撰、與道士王虛正趙仙甫并諸學士參議修老子疏」とあるは玄宗御疏製作の事をいつたらしく、従つて疏は玄宗の自作でなく、王虛正等の手に出たらしい。玄宗は又孝經の注をかいて居るが、孝經の注は元行沖に詔して作らしめて居るなどから推測しても、老子の注だけが自作で疏は臣下の奉勅修と見るべきであらう。彭耜道德眞經集注略説に廣川藏書志を引いて、疏は王顧等が玄宗の命を奉じて撰ぶ所だといつてゐる、王顧は王虛正であるまいか。

玄宗御疏舊唐志と杜光庭は六卷としてゐるが新唐志には八卷とし、現今道藏本は十卷に分つて

ある、而して宋志には唐玄宗注二卷と玄宗音疏六卷とをあげて、更に王顧の疏四卷をのせてゐる。道藏本の十卷疏は後人の分析に相違ないが舊唐志の六卷本と新唐志の八卷本とは如何なる關係にあるものであらうか。簡単に考へれば八字は六の誤りと見ればすぐ説明されるが、御注孝經に開元初注本と天寶再治本との二種があつて、其の注を異にし、元行沖の疏も又再修されたらしく、唐志に二卷本をのせ宋志に三卷本をのせてゐるなど綜合して考へると、老子の疏にも初疏と後疏とあつて、舊唐志は初疏六卷本新唐志は第二次の疏八卷本をのせ、宋志の王顧疏四卷は八卷本の疏を合せたものであるまいか。冊府元龜に天寶五載玄宗の詔をのせて載營魄の載字を改めて哉となし、上章に移し讀むべきだと勅あつたといふが、今存する易州開元幢も道藏注本も哉に改めて居らずして、郭忠恕佩觿に至り玄宗の詔に従つて哉字にしてゐるなど考へると、現今傳はる玄宗注と疏は開元時の初注及疏で、此外に再修本が存したかも知れぬ。

一〇一、杜光庭道德真經廣聖義三十卷

存

此本は現存道藏羔字號景字號に互つて入つて居て、その卷首には唐廣成先生杜光庭と題し、序の中に前代の詮疏箋注六十餘家を列し、最後に玄宗の注と疏を讚歎して、自ら衆書を採摭して玄宗の聖義を推廣して廣聖義三十卷を纂成したと結んで居る。序末の年紀は天復元年龍集辛酉九月十六日甲子とあつて玄宗注成る後百七十年後の著作である。

一〇二、王眞道德經論兵述義二卷

存

此書現に道藏器字號中に入る。但道藏本は道德經論兵法要義述と題して四卷に分けてゐる。思ふにもとは二卷で後を開いて四卷としたものであらう。其書の内容は先づ老子五千言中から大道至德修身理國の要數十章をあげて後に論兵に及んでゐる。杜光庭によると王眞は漢州の刺史といふのみであるが、阮元の四庫未收書目には其卷首に元和中之を淮獻して憲宗の褒美を賜はつた事をのせてゐることを指摘し、王眞は朝議郎で出て、漢州の軍事を領し久しく戎行に列してゐた人だとある。

一〇三、符少明道譜策第二卷

佚

此れ杜光庭列する所六十餘家の一、宋志の扶少明道德經譜二卷は即此書であらう。文獻通考二一一卷に崇文總目を引いて道德經譜二卷道士扶少明撰、扶少明は何代の人か詳かてなく、道德經章句を以て略して義訓をなすとある、其大體をしのぶことが出来る。

一〇四、樹鍾山老子注二卷

佚

一〇五、李允愿老子注二卷

佚

一〇六、戴詵老子義疏六卷

佚

一〇七、憑廓老子指歸十三卷

佚

右四種唐志所載、その作者の事迹を詳かにせぬ。

一〇八、臂閻仁諱注老子二卷 佚

臂閻仁諱武后時の人て聖曆中司禮博士となつた人（新唐志及唐書一九九尹知章傳）

一〇九、廬藏用老子注二卷 佚

廬藏用字は子潛幽州范陽の人、陳子昂、趙貞固、宋之間、司馬承禎等と方外の十友と稱せられた人、艸隸に巧て當時の碑碣に其筆蹟をのこしてゐる。其傳記は唐書一二三に出てゐる。

一一〇、邢南和老子注 佚

開元二十年上

一一一、憑朝隱注老子 佚

憑朝隱は長樂の人開元初詔易老莊の學者を擧げしめたとき、平陽の敬會眞、會稽の康子元とともに天子に進講した人てよく老莊の祕義を推索したといふ（新唐書二百康子元傳）

一二二、白履忠注老子 佚

白履忠は汴州浚儀の人開元十年に王志愔の薦によつて侍讀と成つたが久しからずして辭しかへつた、（新唐書九十六）

一二三、尹知章老子注 佚

尹知章は絳州翼城の人、中宗の朝に一度擧用されたが後田里に歸り學問を修め睿宗のとき再び擧げられて開元六年年五十餘で死んだ。尤も易老莊に明かて著書に孝經、老子、莊子、韓子、管子、鬼谷子の注があつた。（舊唐書一八九下、新唐書一九九）

一一四、陳庭玉老子疏 佚

開元二十年上、校書郎を授けられた。

一一五、孫思邈注老子 佚

孫思邈は京兆華原の人、百家の學に通じて居たが殊に老莊に長じ、著述に老子注と莊子注とがあつたが今は傳らぬ。傳記は新唐書一九六にある。

一一六、師夜光三玄異義三十卷 佚

師夜光は幽州の人、開元二十年此書を奉つて校書郎直國士監となつた。其事跡は新唐書二百四張果傳に見えてゐる。

一一七、李含光老子莊子周易學記三卷義略三卷 佚

李會光は揚州江都の人で、本姓弘といつたが孝敬皇帝の諱をさけて李と改めた、天寶間の人である（新唐志）

一一八、臯善經注道德經二卷 佚

吳善經は貞元中の人だといふが詳しいことは判らぬ。

一一九、陸希聲道德經傳四卷 存

陸希聲は蘇州吳郡の生れて唐末昭宗に擧用された人、博學能文殊に易春秋老子が得意であつたといふ（新唐志一一六）其老子傳四卷は今も猶道藏必字號中に存する。

以上は漢志隋志、兩唐志を主として他の書物にあつて、私の知り得た老子の注釋書を列擧して見たが、宋以後の注解を此例に效つて羅列するのは煩に堪へないから、私が目睹し得たものだけに止める。

一二〇、道德眞經玄德纂疏二十卷

此本は道藏の使字號可字號覆字號に收められてゐる。卷端に唐玄宗御注并疏、嚴君平李榮注、成玄英字、強思齊纂と署して、卷首に杜光庭の乾德二年の序がある。序によると強思齊は字を默越といひ濛陽の人である。此書について特に注意すべき點は成玄英の疏を全部引いてゐて、これから成疏を完全に還現せしめ得ることである。それから又李榮の注も今道藏にあるものは殘本であるが、この書によつて補ひ得るものがある。

一二一、喬諷老子疏節解二卷

此書は宋志に著録されてゐて、文獻通考の二二一卷に崇文總目を引いて、喬諷は僞蜀に仕へて諫議大夫知制誥となつた人で、此書は敕命を奉じ唐明皇注疏及杜光庭の廣聖義から其肝要な部分を摘出して己が意見を附したのだといつてゐるが、外の著録には餘り見えてゐない。今道藏才字號に唐明皇疏外傳十卷をのせてゐる、稱して明皇疏といふけれども、其卷首に杜光庭廣聖義の總論の部分を引き、本文に入つてからも注云疏云として明皇注疏を摘出してゐるが、更に義云として杜光庭を引き、間々摘録者の意見もあつて、崇文總目に紹介された喬諷疏義節解と似てゐる。但喬諷疏義節解は二卷と記されて、此本が十卷である點は一致しないから別本であるかも知れぬが、又宋志の記載の卷數が道藏と符合せないのはありがちの事であるから多分間違なからう。

一二二、陳景元注老子二卷

碧雲子老子道德經藏室纂微二卷

宋志には陳景元の道德經注二卷を出し、別に碧雲子の纂微二卷をあげて「名を知らず」と注してゐるが、通志藝文略には纂微二卷を陳景元に歸し、宋の彭耜の集注の首にあげた解經姓氏の中に「陳景元字は太初、建昌の人、家を出て道士となり天臺山に入り張無夢に師事し、妙に老莊の旨を得たり、博學多聞にして藏書數千卷、當世名公多く之に従つて遊ぶ、自ら碧虛子と

號す、熙寧中屢召見に膺り、著すところ道德經藏室纂微篇を進め、號を眞靖大師と賜ふ」といつて居るから、宋志の碧雲子は碧虚子の誤りて、纂微と陳景元注二卷とは同じものであらう。現在道藏の欲字號から難字號の初にあたつて陳景元の纂微篇十卷があるのは恐らく此書であらう。尤も宋志と通志とは二卷と記して藏本には十卷とあるのは卷數が合はないが、これは道藏纂集者の分析したのであらう。

一二三、薛致玄道德眞經藏室纂微開題科文疏五卷

同 藏室纂微手鈔下卷（上卷闕）

右二書道藏難字號に收む。初に藏室纂微疏鈔の序がある。太霞眞人薛致玄が陳景元の疏を講じて科文義注七卷と纂微開題及總章夾頌を著したとあるのは、想ふに右の二書は科文義疏七卷の殘闕で、此外に纂微の開題と總章だけ別行のものがあつたのであらう。纂微手鈔は陳景元の注を摘出して其注の本づくところを考證したもので、講義の草稿であるらしい。

一二四、呂惠卿注老子二卷

呂惠卿字は吉甫は此注二卷の外に莊子注十卷があつたと文献通考に見えてゐる。丁氏八千卷樓には鈔本を藏した様だが、私の見たのは道藏必字號にある本だけである。其初に元豐元年正月の上表がある。

一二五、宋徽宗御解道德經四卷

右道藏才字號に收む。

一二六、宋徽宗道德眞經解義十卷

卷首序あり、卷端登仕郎臣章安撰義と署す。

一二七、道德眞經疏義十四卷

之も亦徽宗注の疏で、卷端に太學生江徽疏と題し「序に杜光庭の廣聖義に模して徽宗注を敷衍した旨を記してゐる、今道藏莫字號忘字號にある。

一二八、陳象古道德眞經解二卷

此本道藏知字號に收められて初に建中靖國元年の自序がある。建中靖國は宋の徽宗の年號。

一二九、道德眞經集註十卷

右道藏靡字號と恃字號とに渉る。凡て十卷で卷首に葛玄撰と題する長い序がある。此序は即葛仙公の老子序訣の序の部分で、之に口訣がついてゐたのが即序訣の全文である。（拙著老子原始参照）此序の次には唐玄宗の序と宋王雱の序があつて、本欄は河上公、王弼、玄宗、王雱の四家の注をあつめたものである。卷尾には元符元年西曆（一〇九八）前權英州軍事判官廻の跋があつて、跋によると昔から老子を注したものは河上公、王弼、明皇三家の注があつて、見ると

ころ同じでないが要するに大道の本を究めたもので、近世王雱は道德性命の學に精しく、その老子注も自ら一家をしてゐる。乃で太守張公が覺舎の學者に命じて四注を匯纂して刊印せしめたものが即此書で、其注文は一字も損益を加へて居ないといつてゐる。

此集注について特に注意を要することは、數ある老子注の中から河上公、王弼、玄宗、王雱の四家を選擧したことが第一編纂者の卓見である。次に此書によつて老子序訣の大部分が保存されて之によつて河上公本の性質を究明し得る資料をのこしたことが第二の功績である。次に後世の集注本は徒らに採集の範圍を廣くし編纂者の主觀に本づいて損益されてゐるのに反して、代表的四家の全部を存したことが第三の悦ばしい點である。吾々は現今王弼注本の精善なテキストを持たぬが、此本によりて今本王注の誤りを正し得る點の少なくないことは未だ學界に注意されて居ない様だが、特筆大書すべき價值がある。現在刪られてゐる王弼の注本は此本によつて補ふことが出来る。私は後日機會を得て王弼本の校定を試みたいと願つてゐるが、此本も又其校定の有力な資料の一つである。王雱は有名な王安石の弟で、その老子注は王安石、陸佃、劉槩、劉涇とともに崇寧の五注と稱せられた注で、宋代儒學者の老子注中特に著名な物であるが、此れ亦此本から復元することが出来る。

一三〇、司馬光老子道德經注二卷

右宋志に著録されて居て、道藏得字號にも收められてゐるが、道藏では道論眞經論四卷と成つてゐる。然し其内容は論でなくて注である。

一三一、蘇轍老子道德經義二卷

これも亦宋志にのつてゐて道藏得字號中にあるが、道藏本は道德眞經注四卷と成つてゐる。卷尾に大觀十二年蘇子由（即轍の字）題言があつて、これによると此注は蘇子由が筠州に謫せられ僧侶と交際した結果佛教を信する様になり、其後に之を注したもので、書中屢佛教で老子を解釋してゐる。朱子の雜學辨に「蘇侍郎晩に此書を著し、吾儒を老子に合せて猶未だ足らずとなし、又釋氏を并せて之を彌縫す舛と謂ふべし」といふのは即此書である。

一三二、王守正道德眞經衍義手鈔二十卷

此本道藏量字號と墨字號とに涉つてゐるが、最初の二卷を失つて序跋もない。此中に引かれた注は主として杜光庭、陳碧虛、蘇子由で、其以後の説をのせてゐないから恐らく宋時のものであらう。

一三三、葉夢得老子解二卷

葉夢得字は少蘊、姑蘇人、自ら石林翁と號す、彭耜道德經集注雜說下に其説を引いて「論語竊かに我を老彭に比すと記す、孔子に後るゝものは孟子にして孟子の儒に於ける、蓋秋毫も少亂

せざるなり、其揚墨を拒ぎ儀秦を排するは桀紂に過ぎて終に老子に及ばず、乃其盡心知性以て命に至るをいふは則老氏の深く致意する所なり、然して後老氏の書孔孟も未嘗て廢せざるを知らる」といつてゐるがこれによつて大體の考は知られる、此書宣統辛亥年葉德輝の刻本がある。

一三四、邵若愚老子注四卷

此本道藏改字號中に收められて居る。其末に紹興庚辰陳某の跋があつて紹興二十九年に出來た本であることが判る。宋志に李若愚注一卷があるが或は此書であるまいか。

一三五、彭紹道德真經集注十二卷

同 集注釋文一卷

同 集注雜說二卷

右三種は道藏恃己長の三字號に涉つて收められてゐる。集注卷首に紹定己丑著者の自序があつて、次に、説序と宋解經姓氏をのせてゐる。試に解經姓氏を引かう。

政和御注

碧虛子陳景元、字太初、建昌人、出家爲道士、入天臺山、師事張無得、妙得老莊之旨、博學多聞、藏書數千卷、當世名公多從之游、自號碧虛子、熙寧中屢膺召見、進所著道德經藏室纂微篇、賜號真靖太師、

涑水司馬光 字君實、陝州夏縣人、溫國文正公、

潁濱蘇轍 字子由、眉山人、自號潁濱遺老、謚文定公、

臨川王安石 字介甫、臨川人、荆國文公、

王粲 字元澤、荆公之子、

陸佃 字農師、山陰人、門人號曰陶山先生、

劉槩 字仲平、開封人、

劉涇 字巨濟、簡州陽安人、自號前溪、

自荆公下至此、總名崇熙五注、

道真仁靜先生曹道冲 字希蘊、女道士、世號曹仙姑、賜號清虛文逸大師、道真仁靜先生、

真真子 馬蹄山人、不著姓氏、

三峨了一子李文和 蜀人、

陳象古 名在黨籍中、

葉夢得 字少蘊、姑蘇人、自號石林翁、

清源子劉驥 字德稱、泉州人、

晦菴朱熹 字元晦、建安人、自號晦菴、一號紫陽子、文公、

黄茂材 字少譽、福州連江人、自號海濱居士、

程大昌 字泰之新安人、文簡公、

林東 字子晦、福州閩縣人、自號三山樵子、

本來子邵若愚 錢塘人、

以上十九家が此書の中に引據されてゐるが然し全部を引いてゐるのでなく取捨が加つて居る。釋文一卷は政和御注本によつて李林二家の音釋をあげて、陸德明釋文の足らぬ所を補ふといつてゐる。李林とは即李文和と林東とであらう。老子の注釋は無數にあるが、其異同を校合して音釋したものは極めて少ない。陸氏釋文の後には唐の傅奕の音があつたらしいが、今は傳はらぬ。此本實にその缺を補ふものといふべきである。又此書の中屢陸氏釋文を引いてゐるが、間々今本釋文の誤を正すに足るものがある、此點特に價値がある。

集注雜説は上下二卷に分れ、古から老子に關する佚聞、論説をあつめたもので考證の資料になるものが多い。明の焦弱侯老子翼の附録は此書に材を取るものが多い。

一三六、董思靖道德眞經集解四卷

右道藏短字號本、前に淳祐丙午序説があつて、序説の中に老子の注釋は澤山あるが折衷するところがなから諸説の中よいものをおつめ、間々己れの見を附し又音釋をつけて異同を訂した

といひ、又白樂天の語を引いて、老子五千言は藥をいはず白日昇天をいはずといつて、道家の迷信的方面を排斥してゐる。而して其本注に引かれた諸家も司馬光、蘇轍、朱子、伊川、文定等の儒家の説が多い點を見ても此集注の性質が知られる、毎節の下に先づ己れの注を加へ、その後圈を附して先人の説を引き、最後に右幾章と題してその下に河上公本の章名を出して諸家の意見を引き、全章の大意を明にしてゐる。其第三十一章と七十五章の下に「王弼曰疑此非老子作」とあるは、今の王本にない文句で特に注意すべきである。此王弼注は宋以前の王本には存在したもので、四家集注本にも引かれ、王應麟晁景迂も之を見てゐる。而して敦煌本支言新記にも引かれてゐる。

一三七、范應元老子道德經古本集注二卷

此本宋志にもおせず、道藏にも入つて居らぬが、近年上海商務印書館から出た續古逸叢書の中に宋本の影印がある。此書、前玉隆萬壽宮掌教南岳壽寧觀長講果山范應元集注直解と題し、後序一則あり、湛然堂無隱谷神子范應元薰香謹序と題し、劉惟永の道德眞經集義引用書目にも此書をのせてゐる。褚伯秀の南華眞經義海纂微は范無隱の説を引きその跋に伯秀が淳祐丙午の歳京に於て范應元の講席に侍したことをいひ、其師の事を記して范應元字は善甫、無隱と號す、蜀の順慶の人、學内外に通じ識天人を究む、靜重端方、動必ず禮に中る、經に所謂言はずして

人に飲ましむるに和を以てし、人と並び立ちて人をして化せしむるもの是也と賞讃して居る。今其内容を檢するに前人の説を引くもの三十餘家に及んでゐるが、必ずしも老子の注のみをあつめたのでなく、韓康伯、郭璞の説などは易注爾雅注によつた事疑ひない。褚伯秀が學内外を兼るといつたのも故あることである。而して此内に特に悦しく思ふのは、既に亡びた傅奕の音義を引いたことと彼が見た王弼本が今本と異つてゐることである。私は此書によつて今本王弼本の誤りを正し得る材料を得たこと、及傅奕本の考證に便なることを悦ぶ。其本文は古本といつてゐて、傅奕本に近いが亦異同も少なくない。馬夷初教授は此古本は王弼本だらうといつて居られるが、書中屢「王弼同古本」といふ語があつて王本と全同はしない様に思はれる。想ふに茫應元當時此種のテキストが別に存在したのであらう。

宋史藝文志に「谷神子注經諸家道德經疏二卷」をあげて其下に「河上公、葛仙公、鄭思遠、睿宗、玄宗疏」と注し、文獻通考に崇文書目を引いて「此書撰人の名氏を著さず、河上公葛仙公鄭思遠唐睿宗明皇諸家注を集め其自疏を序す」といつてゐる。其谷神子注經とあるは此書の著者と關係があるまいか。

一三八、林希逸道德真經口義四卷

右道藏彼字號本、景定辛酉に成る。初に發題があつて、次に解を施す、往々佛段にわたる此書は流傳甚だ廣し、我國にも屢翻刻されてゐる。

一三九、李息齋道德真經解義四卷

右道藏絲字號にある、焦弱侯の老子翼に息齋注を引くもの多く、その采摭書目にも息齋注を出して「嘉謨著道德經先天道德經二解」と注し、丁氏八千卷樓書目宋李嘉謀の道德真經義解四卷と、元始說先天道德經注解五卷とをあげてゐる。道藏本には序跋なく唯息齋道人解と題して居るだけであるが、本名は李嘉謀で息齋はその號であらう。道藏目錄詳注には、同じく絲字號中にある李榮注を息齋としてゐるが、これは全く別人で混同してはならぬ。

一四〇、趙志堅道德經疏義六卷

これ亦道藏悲字號に收められてゐるが、前三卷を闕いて今たゞ德經疏義だけがある。每章目の下に科段を分けてゐてその序跋の考ふべきものがない。宋志に趙志堅道德經疏三卷をあげてゐるのは恐らく此書の事であらう。

一四一、趙學士道德真經集解四卷

右道藏罔字號收録、前後に序跋もなく、古注をも引いてゐないから、其製作年代も作者の書跡も明瞭でない。焦弱侯の老子翼采摭書目に趙秉文集解を出して「宋學士」と注してゐる點から想像すると、趙學士は趙秉文であらう。趙秉文の集解四卷は小萬卷樓に藏すと四庫簡明目録標

注に見えてゐるが、外に傳本あるを知らぬから兩本を比較するにたよりが無い。

一四二、杜時雍道德眞經全解二卷

右道藏岡字號にある。初に正隆四年（正隆は金の海陵王の年號で宋の紹興二十九年に當る）の序があつて、序によると眞定（即今直隸の正定府）から毫にかへつた人がもちかへつた本を、時雍が刻したものだといふ。

一四三、李霖道德眞經取善集十二卷

右道藏墨字悲字兩號に渉る。卷首に大定壬辰河内劉元升の序がある。大定は金の世宗の年號で其四年は宋の乾道八年に當る。序に「饒陽の李霖字は宗傳、性善く恬恬幼より老に至るまで終身確然として五千の文を精研し、諸家の長を會聚し己れの見を并叙して取善集六卷を成す、其舊友其勤を賞して其志を成し工に命じ鏤版せしむ」とある。其作者と其成書とを説明し得たものである。序には六卷というて、十二卷に成つて居るのは道藏編纂者の分析した結果であらう。書中唐以前の説は大抵張君相の三十家集注に本づいてゐるらしく、宋人の注では徽宗御注及び呂吉甫、陳景元、王元澤、司馬溫公、蘇子由、劉仲平、馬巨濟（劉巨濟カ）曹道仲の説を取つて居る。

一四四、道德眞經四子道古集解十卷

右道藏通字號に收む。初に古襄寇才質集と題し、前に金大定十九年（即宋の淳熙六年）の自序がある。序によると編者は草澤無名の野人で、老子舊注の眞を失するをなげき、莊列文庚の四子によつて解釋したもので、もとは四子古道義と名づけたものらしい。舊注から離れて莊列によつて解を求めたのは確かに一見識といへる。序によると寇才質には別に道德經經史疏十卷があつて、此注と表裏をなしたといふが今は傳はらぬ。

一四五、道德眞經次解二卷

右道藏岡字號に收められて居る。卷端に無名氏著と題し「此本舊本と同じからすといへども自ら義理あり、細かに議論すれば別に旨趣あり將來君子妄に修改商較する勿れ」と注し、上下卷末に通行本との異同を條擧してゐる。序によると此注本の經文は遂州龍興觀の碑上に刻せられた老子に本づいたものだといつてゐる。遂州は四川省にある地名で此地に龍興觀が立てられたことは唐會要に出てゐるから、此碑の經文も唐代のものだと推測せられる。さうして輓近敦煌から出た寫本の斷片にこれと全く同じものがある。彼此對照すると唐初に流行した老子の一テキストを復元することが出来る。此意味に於て次解本は老子研究の重要な資料といはねばならぬ。

一四六、吳澄道德眞經注四卷

右道藏短字號本百子全書本等があつて四庫全書にも著録されてゐる。提要によるとこの書は元

の大徳十一年に吳澄が病により京を辭して南に下り清都觀に留まつた際に著した書、吳澄は陸象山學をついだ人で、此注も儒學で老子を解したものであるが精邃なところが多いといふ。其尾に「老氏之書字多誤、合數十家、校其同異、攷正如右、莊君平所傳章七十二、諸家所傳章八十一、然有不當分而分者、定爲六十八章云、上篇三十二章二千三百六十六字、下篇三十六章二千九百二十六字、總之五千二百九十二字云」とある、その分章は魏源の老子本義に襲はれてゐる。

一四七、李道純道德經會元二卷

道藏淡字號中にある。首に至元庚寅の序、次に序例、序例中又正辭究理の二項を分つ、正辭は經文の異同を論じたもので、道純は河上公本を尤もよいと信じた人で、彼によると河上本に河上公解注本と、二家全解本と章句白本との三種があつて最後の本が尤もよいといひ、其同異廿一條をあげてゐる。而して究理は諸家解注の理に合はない點を指摘したものである。其注例、初に經文に従つて頤神養氣の要を説き、次に全章の理を説き最後に頤を作つて明心見性の機を示す、序によると道純は紫清道人の道德寶章を好むといふ。紫清道人は本名を葛長庚といひ宋の頃武夷山に居た道士で白玉蟾とも號した人、その寶章一卷は文字の意義を注せず、たゞ其自得をのべたもので禪理に近いものだといはれてゐるが、道藏目錄詳注には道純の注も禪宗に類すと評してゐる。

一四八、林志堅道德眞經注二卷

右道藏絲字號中に收められてゐる。卷首に至正歲次甲午著者の自序があつて、序後に老子の經文を綴り合はせて兩經の序としてゐる。卷端には玄門開眞弘教大真人廣陵仁齋林志堅注と署名し毎章名は河上公本を襲うて、其注皆經中他の章の文句を以て解を施してゐる。是れ老子を以て老子を解すとも評すべきもので他の注解と趣を異にしてゐる點である。

一四九、鄧錡道德眞經三解四卷

右道藏改字號本、初に大徳二年の自序がある。書中三種解を施す、第一は解經といつて老子經文に虚字を増益して讀みやすくし、第二は解道といつて理によつて天地の大道をのべ、第三は解徳といつて天地間の總ての事象が理に合することをのべ、此三種の解を合せて一としたから三解といつたのである。

一五〇、劉惟永、道德眞經集義三十一卷大旨三卷

右道藏染字詩字讚字の三號に渉る、卷端には劉惟永集、丁易東校正と題して居るが、その跋文によると劉丁兩家の所藏本を合纂したもので、もとは三十一卷であつたといふが今は十七卷と大旨三卷だけ残つて居る。大旨中に集められた諸家の姓氏は左の通りである。

河上公 漢人作注

王輔嗣 魏人諱弼作注

唐明皇 玄宗大聖大明孝皇帝、開元癸亥御注並疏、

杜光庭 後蜀廣德先生、天復辛酉作廣聖義

宋道君 徽宗皇帝御注

王介甫 宋太傅荆國文公諱安石字介甫作注

蘇穎濱 宋太中大夫門下侍郎、諱轍 字子由、元符庚辰作注

呂吉甫 宋觀文殿學士醴泉觀使諱惠卿作解

陸農師 宋中大夫知亳州諱佃作解

王元澤 宋龍圖直學士左諫議大夫臨川伯諱粲作解

劉仲平 宋臣作解

劉巨濟 宋職方郎中諱涇、作解

丞相新說 見八注中不載其名

劉 驥 號清源子、紹興丙寅作解

趙實庵 沖真寶元大師浮山玉虛觀住持賜紫、字明舉、諱道昇、紹興壬申作解

邵 愚 號本來子、紹興己卯作解

王志然 號見獨大師、乾道己丑作解

程泰之 宋吏部尚書龍圖閣學士文簡公諱大昌乾道己丑作易老通言

黃茂材 宋知荆門軍事、淳熙甲午作解、

朱紫陽 宋太師徽國文公諱熹字元晦、慶元乙卯有楚辭辨證及語錄

詹秋圃 宋儒林諱節、號漫叟、作解、

白玉蟾 號紫清老人解、

廖粹然 號希夷大師、作解、

陳碧虛 諱景元、號碧虛子、乙未造解、

謝圖南 宋朝散大夫、號蓮山天飴子、淳祐丙午作註、

林處齋 宋翰林學士號竹溪、諱希逸、景定辛酉作口義、

茫應元 南嶽壽寧觀主號果山無隱齋谷神子、作解、

徐君約 宋鄂州諸軍料院諱權景定壬戌解序一章

薛庸齋 諱玄大元河南路提學、作解、

休休庵 號蒙山絕牧叟、名德異、至元戊寅作解、

牛妙傳 通真大師前成都府萬壽宮知宮提舉、號澄明子、至元庚辰作或問、
楮伯秀 古抗道士作解、

喻清中 寶慶府教授、至元乙酉作解、

楊智仁 號無物子、至元丁亥作解、

晉六虛 諱元一號六虛散人、至元辛卯作解、

李是從 特賜純粹先生、號谷神子、造解元貞乙未刻本、

已上三十六家係全解削煩編次

張仲應 玉清上相諱明道、寶祐癸丑造解、

張靈應 諱亞、宋封神文聖武孝德忠仁王、造或問、

以上二家係鸞筆、

蘇敬靜 前文林郎潭州糧料院、宋開慶進士敬靜蘇起翁、本一庵居士、

紫元皐

吳環中

以上四家係續補

以上は劉惟永が引いた前代の注釋で廣く宋元人の注を存してゐる點に於て尊重すべきであるが、惜しいことには完全に残つてゐないことである。序によると此本が出来上つたのは元の大徳三年にあたる。

一五一、杜道堅道德真經原旨四卷、原旨發揮二卷

右道藏彼字號本、杜道堅字は南谷、當塗の人、武康計籌山昇元觀の道士、此注大徳年間に成る。發揮二卷は十二章から出來てゐて、初六章は周以前老子が屢生れ代つて皇王の治を教へたこと、後六章は周の世に降生して西遊した事を記してゐるが、要するに化胡經等の傳説をあつめたものにすぎない。

一五二、張嗣成道德真經章句訓頌二卷

右道藏淡字號本初に至治壬戌の自序をのせてゐる。

一五三、道德真經解三卷

右道藏淡字號にあつて、無名氏内解と題してゐるが何人何時の解か明でない。

一五四、明太祖御注道德經二卷

右は明志にあげてゐるが道藏男字號に收められた本は四卷に分たれてゐる。

一五五、危大有道德真經十卷

右道藏覆字號に收む。卷首に洪武丁卯肝江危大有の序があつて、序中に「諸家注釋或は異或は

同、得あり、失あり、是に於て河上公何心山等十餘家注解を以て其訓釋詳明にして理長し牽強せざるものを取り集めて一部上下二卷となし、名けて道徳經集成といふ」とあるからもとほ二卷で道蔵本は編纂者が卷を分けたものであらう。此中に引かれた前人の注は次の通りである。

河上公

呂知常 (呂知常は宋の孝宗の時の人、其道徳經講義十二卷明刊本あり)

何心山 字處尹

李道純 號清菴

劉師立 號眞靜子

倪思 號齊齋

林希逸 號鷹齋

蘇轍 字子由

黃思靖

晁

柴元阜 號知白

吳澄 號草廬

一五六、焦竑老子翼二卷考異一卷

此書は明の焦竑字は弱侯の著で卷首に萬曆十五年の序がある。序によると、著者は二十三歳の時から老子を讀みはじめて二十年間もかゝつて此本が出来たといふ。其初に采摭書目があつて前人の注六十四家をあげて居るが、その大部分は道蔵中のもので古い注解は大抵孫引にすぎない。その道蔵にも前に列擧した集注本にも引かれてゐないものは薛君采の集解、王純甫の老子億、李宏甫の解老くらゐである。薛君采名は蕙明の亳州の人、其老子集解二卷考異一卷は惜陰軒叢書中に收められて居り、其序は老子翼の附録にも引かれてゐる。序によると薛蕙の集解は嘉靖九年に出来上つて刊行されたが、後再治して嘉靖十六年完成したものである。附録考異一卷は焦竑の考異の基礎と成つた本である。王純甫名は道、順渠と號す、山東武城の人、その老子億四卷は流傳甚だ少なかつたが、幸に前田侯爵家尊經閣に一本を存し、昭和七年その文集とともに影印せられた。李容甫名は載質、溫陵の人、著すところ老子解二卷、李氏春秋、莊子内篇解、心經解がある。老子解の序は翼の附録に引かれて居るが原本は見ない。然しその序で想像すると薛王李三人は儒佛と老子とを融合する考へ方で、焦弱侯と似た思想の人であるらしく、恐らくこれがこの時代一般の學風であらう。

宋から明に至る間の老子の註釋書を通覽すると大略二つの傾向が看取される。第一は新しい著

作としふよりは寧ろ先人の説を集成した書物の多いこと、第二は儒佛を合糅して新義を立てたものはあるが、老子本来の古義を闡明したものの少ないことである。清朝になつて考證學が一世を風靡するに及んで此傾向は一變し、先づ異本を校勘して正しいテキストを作り、古書に參考して古義を明にすることを主眼とする様に成つた。此の時代の代表的著作は畢沅の老子攷異、馬叙倫の老子覈詁、王念孫の讀書雜誌之餘、俞樾の諸子平議等であらう。

(一) 清 以 後

王夫之、老子衍二卷 船山遺書本

清世祖御註、道德經二卷 四庫全書本

張爾岐、老子說略二卷 四庫全書本

汪縉、讀道德經私記二卷 存目

黃元御、道德經懸解二卷 存目

唐瑄、老子注二卷 雍正五年

胡與高、道德經編註二卷 乾隆戊辰

徐大椿、道德經註二卷 四庫本

金道果、道德經寶章翼 抄本

未齋老子新解 錢大昕序

牟庭、釋老、道德經釋文 未刊

花尙、道德經眼二卷

王定柱、道德經臆註二卷

黃文運、道德經訂註 序見湖海文傳

吳鼎、老子解二卷 昭代叢書

嚴可均、老子唐本考異 續語堂碑錄

畢沅、老子道德經考異二卷 經訓堂本、日本官版

姚鼎、老子章義二卷 拙拙軒全集本

紀大奎、老子約說四編 知慎齋本

朱敦毅、老子道德經參互二卷

倪元坦、道德經參注二卷

魏源、老子本義二卷

潘靜觀、道德經妙門約

- 俞樾、老子平議一卷 春在堂本
 高延第、老子證義二卷 光緒十二年
 陸心源、道德經指歸校補三卷 群書校補
 易順鼎、讀老札記二卷補遺一卷 光緒甲申
 王闓運、老子注二卷
 陳澧、老子注
 易佩紳、老子解二卷 光緒壬辰
 楊文會、道德經發隱一卷
 嚴復、老子道德經評點二卷
 劉師培、老子斟補二卷 國學叢刊
 又、老子韻表一卷
 馬其昶、老子故二卷
 李鱣、讀老淺疏二卷 春暉叢書本
 楊樹達、老子古義二卷
 羅振玉、老子考異二卷 永豐鄉人雜著本

羅運賢、老子集解 華國月刊

顧實、道德經解詁 國學叢刊

馬叙論、老子覈詁四卷 佚文一卷

私が「老子の研究」に道德經の注釋書の解題をかいた後間もなく、民國十六年七月に王重民君の「老子考」二冊が中華圖書館叢書の第一種として發刊された。その中に著録された書物の數は私の解題よりは遙かに多く、私が全く手をつけなかつた清朝以後の著作にも及んでゐる。そこで王重民君の書から清人の注釋書の名を拾つて見ると以上の二十二種を得た。猶この外にも遺漏を拾つて見ると

盧文昭、老子音義考證一卷 抱經堂叢書本

張煦、老子考異錄一卷

洪頤煊、老子叢錄一卷

徐鼎、老子雜志一卷

王念孫、老子雜志一卷

孫詒讓、老子札逸一卷

李慈銘、訂老子一卷 越縵堂日記

- 陶方琦、校老子一卷
- 譚獻、讀老子一卷
- 黃裳、道德經講義三卷
- 徐紹楨、道德經述義一卷
- 陶鴻慶、讀老札記一卷
- 丁福保、老子道德經箋注一卷
- 北平研究院、古本道德經校刊

などがある。更に搜索すれば猶遺漏があらう。これらの書中特に注意を要する點は、(一)此時代に入ると文字の同異を校定した本の多いこと、(二)訓詁學的に解釋しようとしてゐるものが多いこと、(三)分章についても独自の見解を持してゐるもの、存することなどを數へることができ。第一校勘學方面に於てすぐれたものは畢沅、嚴可均、馬叙倫、及び北平研究院等で、特に馬氏の著が最も博覽を極めて居るが、北平研究院の校刊の首には、唐、景龍碑、易州開元幢、邢臺龍興觀經幢、焦山廣明幢、易州景福碑、慶陽道德經、盤屋古文老子碑、寶鷄磻宮幢等の寫眞が掲げられてゐるのはうれしい。第二の訓詁學方面に於ては矢張り王念孫、俞樾、孫詒讓が尤も力があるやうに思ふ。さうして第三の分章については魏源の老子本義は大體に於いて元の吳澄の分章を襲つてゐるが、姚姬傳の老子章義は桐城派一流の文章觀に本づくもので特色もあり參考にもなる。

(三) 日 本

日本の老子注は徂徠學派のものと折衷學派のものが多い、先づ徂徠學派のものをあげると

- 太宰 春臺 老子特解
- 渡邊 蒙庵 老子愚讀
- 片山 兼山 老子類說
- 萩原 大麓 老子考
- 萩原 嵩岳 老子攷
- 久保 筑水 老子考注
- 松下 葵岡 諸子考注
- 重野 櫟軒 老子解
- 太田 子龍 老子國字解
- 龜井 昭陽 老子考

廣瀬 淡窗 老子摘解、折玄
 宇佐美瀧水 校刻王注老子
 海保 青陵 老子國字解
 戸崎 談園 讀老子正訓
 市川 鶴鳴 老子考文
 伊藤 兩村 老莊考
 岳 鸞 老子古解
 冢田 大峰 冢注老子

次に折衷學派のものをあげると左の如くである。

龜田 鵬齋 老莊摺解
 仁科 白谷 老子解
 東條 一堂 老子標注
 大田 錦城 老子妙微
 大田 晴軒 老子全解
 中江 乾齋 老子注解

この外の邦人の老子注釋には

新井 祐登 老子形氣、及隨筆
 豐浦 懷 老子妄言
 三野 元密 老子經古義
 近藤 舜政 老子本義
 伊藤蘭嶼序 老子是正
 金 蘭 齋 老子國字解
 葛西 因是 老子輻注
 佐藤 楚材 老子講義
 根本 通明 老子講義
 三島 毅 老子講義
 久保 天隨 老子新釋

などがある。これらの内特に價值あるものは太田晴軒の老子全解、海保青陵の老子國字解、東條一堂の老子標注である。

□此の文庫は、内容厳選と最低の廉價とを以て第一義とし、専ら大衆普及を目的として刊行す

□此の文庫に収容するものは、東西古今百載の書に亙り、校訂、註釋、翻譯、總て典據たるべきを期す

□此の文庫は、社會、經濟、政治、哲學、思想、歴史、文學、藝術、美術等百載に及ぶ

□表紙意匠中、1は十錢を、2は二十錢を、3は三十錢を示す。以下之に倣ふ

□定價及び送料左の如し

表紙背の符號	1	2	3	4	5	6	7	8
定價(錢)	10	11	13	14	15	16	17	18
送料(錢)	1	3	6	6	9	9	12	14

昭和十五年九月六日印刷
昭和十五年九月九日發行



改造文庫 第一部 第百八十一篇

老子の研究(上)

定價五十錢

著者 武内義雄

發行者 山本三生

東京市芝區新橋七丁目十二番地

印刷者 久家恒術

東京市神田區錦町二丁目五番地

發兌

改造社

東京市芝區新橋七丁目十二番地

振替口座東京八四〇二番
電話芝(43) 四三二一 番番番番

(兩角製本)

(株)社會文成社印刷

改造文庫分類目録

政治・經濟・法律・社會

國富論(上卷)	アダム・スミス著 竹内謙二譯	8	我近世の農村問題	本庄榮治郎著	3	帝國主義論	石澤新二譯	5
國富論(中卷)	アダム・スミス著 竹内謙二譯	6	世事見聞録	武陽隱士著 本庄榮治郎校訂	4	垂統秘録・混同秘策	伊豆信淵著 伊豆公夫譯	3
國富論(下卷)	アダム・スミス著 竹内謙二譯	6	社會フアシズム論	ラビンスキー著 田中勝太郎譯	2	工業分布論	アルフレド・ウエーバー著 澤田謙三譯	3
人口論(上卷)	ロバート・マルサス著 松本信夫譯	5	婚姻と離婚	ウエスターマルク著 青山實夫譯	3	通貨調節論(上)	J. フラートン著 阿野季房譯	5
人口論(中卷)	ロバート・マルサス著 松本信夫譯	5	三民主義	金井寛三譯	3	通貨調節論(下)	J. フラートン著 阿野季房譯	5
人口論(下ノ一)	ロバート・マルサス著 松本信夫譯	5	三民主義續篇	金井寛三譯	4	宗教・哲學・教育・歴史・地理	ハインリッヒ・クノート著 城野謙三譯	3
人口論(下ノ二)	ロバート・マルサス著 松本信夫譯	4	財産起源論	レヴィン・スキナー著 高橋龜吉譯	1	自然科學・美術・音樂	玉川ハインリッヒ著 城野謙三譯	3
マルサス穀物條例論	マルサス著 鈴木鴻一郎譯	3	財政概論	プレブス・リッゲ編 田中次郎譯	4	宗教及び信仰の起源	玉川ハインリッヒ著 城野謙三譯	3
日本經濟論	田口卯吉著	1	プレブス經濟學	プレブス・リッゲ編 田所輝明譯	3	エミール(上卷)	ルイ・ソウウ著 内山賢次譯	4
日本經濟學說の要領	瀧本誠一著	2	經濟地理概論	菊川忠雄編 プレブス・リッゲ編	3	エミール(下卷)	ルイ・ソウウ著 内山賢次譯	4
日本商業史	横井時冬著	4	英國勞働運動史	プレブス・リッゲ編 稲岡運譯	3	リッケルト論文集	リッケルト著	2
日本工業史	横井時冬著	4	原始財産論	エミール・ド・ラブリエ著 野兼一郎譯	6	唯一者とその所有	マックス・ステイルホル著 西園橋六郎譯	6
日本社會史	本庄榮治郎著	4	金融資本論	ヒルファディング著 野兼一郎譯	7	心理學概論	プレブス・リッゲ編 小宮義孝譯	3
封建社會の研究	本庄榮治郎著	2	獨逸社會史(四)	フランツ・メーリング著 本三吉譯	7	改哲學概説	桑木嚴毅著	5

現代哲學思潮	桑木嚴毅著	6	東洋美術(下卷)	中村亮平著	5	性と性格(下)	オットオ・ワイニッゲル著 村上啓夫譯	4・5
キリスト教の本質	フオイエルバツハ著 田村實譯	5	岡倉天心傳	清見陸郎著	5	文化と風土	テ・ワル・マウ著 丸山武次譯	6
カントの平和論	朝永三十郎著	2	妾の半生涯	福田英子著	4	この人を見よ	ニール・チエ著 小栗孝則譯	4
天才論	ロンフロソ著 田村實譯	5	建築と繪畫	内田佐久郎著	5	誘惑者の日記	キエルクゴール著 神保光太郎譯	5
ドイツ古典	ハインリッヒ・ホプフ著 高沖共譯	3	藝術とは何ぞや	トルストイ著 木村義雄譯	3	日本開化小史	田口卯吉著	2
法律哲學綱要(上)	ヘーゲル著 田村實譯	5	人生論	トルストイ著 柳田泉譯	5	老子の研究(上)	武内義雄著	5
法律哲學綱要(下)	ヘーゲル著 田村實譯	6	藝術論	抄(一) 井汲越次譯 抄(二) 井汲越次譯	3 4	老子の研究(下)	武内義雄著	4
ヘーゲル精神哲學概要(上)	グノー・フイツシエル著 田村實譯	6	藝術論	抄(一) 井汲越次譯 抄(二) 井汲越次譯	4	人間の美的教育	フリードリヒ・シラー著 大野隆次譯	4
ヘーゲル精神哲學概要(下)	グノー・フイツシエル著 田村實譯	6	ギョオテ傳	森鷗外著	7	教養の探求	エネルス・テイム著 大野隆次譯	3
ドイッヒス	フランツ・メーリング著 栗原佑著	5	ボオドレエル傳	セシエル・オット著 藤雄譯	2	自然界におけるトマス・ハックスリ	田外茂一譯	4
民族移動史	小山榮三譯	2	ニーチエ傳(上)	ゲニエル・アレヴィ著 野上巖譯	5	精神科學の論理	J. S. ミル著 松浦孝作譯	5
人類文化史物語(上)	ヴァン・ルーン著 神近市子譯	5	ニーチエ傳(中)	ゲニエル・アレヴィ著 野上巖譯	4	科學概論	内山賢次譯	5
人類文化史物語(下)	ヴァン・ルーン著 神近市子譯	5	スピノザ	ゲイブ・ハルト著 豊川昇譯	4	朝鮮慶州の美術	中村亮平著	6
日本美術(上卷)	中村亮平著	5	歐洲文學發達史	フリートエ著 外村史郎譯	6	國文學		
日本美術(下卷)	中村亮平著	6	蟻の生活	マイケル・リッック著 村上一郎譯	4	古事記傳(一)	本居宣長著 風巻景次郎校註	6
泰西美術の知識	中村亮平著	6	性と性格(上)	オットオ・ワイニッゲル著 村上啓夫譯	4・5	古事記傳(二)	本居宣長著 風巻景次郎校註	6

新萬葉集略解(一)	藤千 著	6
註者別萬葉全集	土岐善齋編著	6
作者別萬葉以後	土岐善齋編著	6
現代源氏物語(一)	窪田空穂譯	5
現代源氏物語(二)	窪田空穂譯	5
現代源氏物語(三)	窪田空穂譯	5
現代源氏物語(四)	窪田空穂譯	5
平家物語(上卷)	吉澤義則校訂	4
平家物語(下卷)	吉澤義則校訂	5
大鏡	吉澤義則校訂	5
徒然草	吉澤義則校訂	3
拾遺愚草(一)	藤原定家著 藤原定家著	5
拾遺愚草(二)	藤原定家著 藤原定家著	5
新古今和歌集	吉澤義則校訂	5
金槐和歌集	半田良平校訂	5
新神皇正統記	宮地直一校註	6
宇治拾遺物語(上)	中島悅怡校註	6

宇治拾遺物語(下)	中島悅怡校註	6
大和物語	水野駒雄校註	4
伊勢物語	久松潜一校註	2
雨月物語	山口剛校訂	2
國歌八論	土岐善齋編著	3
平賀元義歌集	植松壽樹・野田實 牛田良平 編註	6
好色一代男	神谷鶴伴註釋	5
折たく柴の記	伊豆公夫校註	6
草雙紙	尾崎久彌編	5
芭蕉書簡集	萩原蘿月校訂	3
冬の日	全釋俳諧(一)萩原蘿月著	3
蕪村七部集	萩原蘿月校訂	3
俳諧七部集	萩原蘿月校訂	3
俳諧續七部集	宇田久校註	3
其角七部集	宇田久校註	3

頭其角俳句集	萩原蘿月校註	5
芭蕉遺語集	萩原井泉水校訂	3
茶一七番日記(上卷)	萩原井泉水校訂	4
茶一七番日記(下卷)	萩原井泉水校訂	4
新華摘・蕪村翁文集	萩原井泉水校訂	2
大經師昔曆	樋口慶千代評註	2
重井筒	樋口慶千代評註	2
萬葉漫筆	佐佐木信綱著	6
東遊記	藤南 著	5
西遊記	今泉忠義校註	5
世間胸算用	井原西鶴著	3
日本永代藏	井原西鶴著	3
現代日本文學	(小説・戯曲・評論・詩・短歌・俳句・隨筆・記行)	
みだれ	藤澤藤線雨譯	4
うた日記	藤澤藤線雨譯	3

澁江抽齋	島外著	6
北條霞亭(上)	島外著	5
北條霞亭(下)	島外著	5
瀧口入道	高山樗牛著	2
樋口一葉選集	樋口一葉著	1
樋口一葉選集(第二)	樋口一葉著	5
北村透谷選集	島崎藤村著	1
山陰土産その他	島崎藤村著	2
海へ	島崎藤村著	5
三	島崎藤村著	3
出	島崎藤村著	4
藤村隨筆(上)	島崎藤村著	3
藤村隨筆(下)	島崎藤村著	5
平	凡二葉亭主人著	1
子規俳話	正岡子規著	3
子規歌論歌話	寒川曙光編	3
坊つちやん	夏目漱石著	2

草	枕頁目漱石著	2
それか	ら夏目漱石著	3
短歌	集石川啄木著	4
詩	集石川啄木著	5
小説集(上)	石川啄木著	6
小説集(下)	石川啄木著	5
評論感想集(上)	石川啄木著	4
評論感想集(下)	石川啄木著	4
書簡集(上)	石川啄木著	5
書簡集(下)	石川啄木著	4
白秋民謠集	北原白秋著	2
白秋童謠集	北原白秋著	2
白秋國民歌集	北原白秋著	2
白秋舞踊詞集	北原白秋著	2
明治大正詩史概観	北原白秋著	4

厭世家の誕生日	佐藤春夫著	1
田園の憂鬱	佐藤春夫著	4
お絹とその兄弟	(他六) 佐藤春夫著	5
上	海橋光利一著	5
日	海橋光利一著	1
海に生くる人々	山崎樹樹著	1
はやり	唄小杉天外著	2
朝の螢	齋藤茂吉著	3
十	年島木赤彦著	2
川のほとり	古泉千櫻著	2
松の芽	中村憲吉著	2
立	春木下利玄著	4
花	榎北原白秋著	3
人間往來	與謝野晶子著	2
楳の	木窪田空穂著	2

自選	野原の郭公	若山牧水著	2
自選	原生	林前田夕暮著	3
自選	空を仰ぐ	土岐善磨著	1
自選	新選秀歌百首	齋藤茂吉著	3
鶯の	卯土岐善磨著	3	
啄木追	懷土岐善磨著	6	
信綱文集	佐佐木信綱著	2	
愛すればこそ	谷崎潤一郎著	3	
愛なき人々	谷崎潤一郎著	3	
屋上の	土古泉千櫻著	5	
青牛	集古泉千櫻著	5	
みだれ髪・小扇・戀衣	與謝野晶子著	3	
句集	虚子高瀨虚子著	6	
井泉水句集	萩原井泉水著	5	
性に眼覚める頃	室生犀星著	4	
室生犀星詩集	室生犀星著	5	
千家元齋詩集	千家元齋著	3	
横瀬夜雨詩集	横瀬夜雨著	5	
修禪寺物語	岡本綺堂著	3	
少年の悲哀	岡本獨歩著	2	
運命論	者國木田獨歩著	2	
武藏	野國木田獨歩著	5	
愛	武者小路實篤著	2	
父と娘	(他四篇) 武者小路實篤著	4	
わしも知	(他十篇) 武者小路實篤著	4	
人生雜感	(感想) 武者小路實篤著	4	
日本	橋泉 鏡花著	5	
無名作家	(他廿篇) 短篇小説集	5	
出	世(他廿篇) 短篇小説	4	
恩讐	(他廿篇) 短篇小説	5	
噂の發生	(他廿篇) 短篇小説	4	
父歸る	(他廿篇) 戯曲	5	
藤十郎の戀	(他十篇) 戯曲	6	
眞珠夫人	人菊池寛著	6	
慈悲心	鳥菊池寛著	4	
新	珠菊池寛著	5	
火	華菊池寛著	4	
受	華菊池寛著	5	
赤い白	鳥菊池寛著	3	
明	禍菊池寛著	5	
新女性	鑑菊池寛著	3	
陸の人	魚菊池寛著	4	
第二の接吻	菊池寛著	3	
東京行進曲	菊池寛著	3	
結婚二重奏	菊池寛著	3	
不壞の白珠	菊池寛著	3	
今戸心	中廣津柳浪著	3	
嬰兒殺	し山本有三著	3	
芭蕉・夜船・草の詩	吉田紋二郎著	3	
楠木正成	直木三十五著	7	

ドレフェース事件	大佛次郎著	3
天保赤門黨	土師清二著	5
血染のパイプ	甲賀三郎著	4
苦の世界	宇野浩二著	3
山戀	ひ宇野浩二著	4
藏の中	(他四篇) 宇野浩二著	5
矢島柳堂	志賀直哉著	2
焚	火志賀直哉著	2
老	人志賀直哉著	2
網走まで	志賀直哉著	2
速夫の妹	志賀直哉著	2
好人物の夫婦	志賀直哉著	2
雪の	日志賀直哉著	2
暗夜行路	(前篇) 志賀直哉著	3
多情佛心	(前篇) 里見淳著	3
多情佛心	(後篇) 里見淳著	3
青	年(上卷) 林房雄著	4
青	年(下卷) 林房雄著	4
自選短篇集	林房雄著	7
斬るな劍	(他九篇) 白井霛二著	5
大暴風雨時代	前田河廣一著	5
淺草紅團	川端康成著	5
童	諺川端康成著	4
化粧と口笛	(他三篇) 川端康成著	5
悪太	郎尾崎士郎著	5
白き手の人々	吉屋信子著	1
風	俗石坂洋次郎著	4
喧嘩駕籠	長谷川伸著	5
角兵衛物語	長谷川伸著	5
唐人お吉	十一谷義三郎著	2
時	の唐人お吉十一谷義三郎著	4
敗	者	
笑ふ男	笑ふ女十一谷義三郎著	5
或る女	(上卷) 有島武郎著	4
或る女	(下卷) 有島武郎著	3
星座	・生れ出る檻み有島武郎著	4
宣言	・クララの出家有島武郎著	3
迷	路有島武郎著	3
カインの末裔	・潮霧有島武郎著	2
お末の死	・かんかん有島武郎著	2
旅する心	有島武郎著	2
石にひしがれた雑草	へ有島武郎著	2
惜みな	愛は奪ふ有島武郎著	2
有島武郎戯曲集	有島武郎著	4
有島武郎書簡集	有島武郎著	5
有島武郎日記集	有島武郎著	4
彌太郎	笠子母澤寛著	4
神變麝香猫	(上卷) 吉川英治著	4
神變麝香猫	(下卷) 吉川英治著	3
女	給廣津和郎著	5
牧水歌集	(1) 若山牧水著	4
牧水歌集	(2) 若山牧水著	4
牧水歌集	(3) 若山牧水著	4

牧水歌論歌話集	若山牧水著	5	近代の戀愛觀	厨川白村著	3	可愛い女	梅田寛著	5
短歌作	法蓮田空種著	6	象牙の塔を出て	厨川白村著	4	チエーホフ書簡集	内山賢次著	5
歌鏡	葉窪田空種著	4	十字街頭を往く	厨川白村著	3	チエーホフ傑作集	チエーホフ著	4
貝殼追放(上卷)	水上瀧太郎著	7	近代文學十講	厨川白村著	5	寡婦マルタ	エリイセ・オルセン著	3
貝殼追放(下卷)	水上瀧太郎著	7	文藝評論集	小林秀雄著	3	サニ	アルツィバセフ著	6
葛西善藏小説集(卷一)	葛西善藏著	3	石川啄木	金田一京助著	5	一青年の告白	シュル・ムーア著	3
葛西善藏小説集(卷二)	葛西善藏著	4	支那遊記	芥川龍之介著	4	一週	リベティンスキ著	2
葛西善藏小説集(卷三)	葛西善藏著	4	愛弟通	信國木田獨步著	4	新巴里の憂鬱	ボドレル著	3
葛西善藏小説集(卷四)	葛西善藏著	3	機	他八篇 橋光利一著	4	母への手紙(上)	ボドレル著	4
葛西善藏小説集(卷五)	葛西善藏著	3	増補	天地有情 土井晩翠著	5	母への手紙(下)	ボドレル著	4
葛西善藏小説集(卷六)	葛西善藏著	3	訂正	俳諧師・續俳諧師 高濱虚子著	5	ランボオの手紙	祖川孝認著	3
葛西善藏感想集	葛西善藏著	5	ふりだした雪(他四篇)	久保田方太郎著	5	死の舞踏	ストランドベリイ著	2
頼朝・爲朝	幸田露伴著	3	南蠻更紗	新村出著	6	佛蘭西童話集(第一)	ボトモン夫人著	3
蒲生氏郷	幸田露伴著	2	勝海舟	舟山路愛山著	5	佛蘭西童話集(第二)	ドルノア夫人著	5
龍姿蛇姿	幸田露伴著	5	外國文學	(小説・戯曲・詩・隨筆・紀行・評論)		佛蘭西童話集(第三)	ヘロイ著	3
幽秘記	幸田露伴著	6	六號室・接吻(他八篇)	梅田寛著	4.5	佛蘭西童話集(第四)	長松英一著	6

野性の呼聲	シャック・ロンドン著	3	オク家の人々(二)	吉良良吉著	4	五月の夜	短篇集 蔵原惟人著	3
奈落の人々	和氣律次郎著	3	オク家の人々(三)	吉良良吉著	4	すばらしい合	キルシヨン著	3
争闘	ジョン・ゴスウオジイ著	2	新人國記	木村恭一著	4	新我等の心	モウパッサン著	4
勝利と敗北	シエストフ著	3	わが毒舌	サント・フリウ著	5	新死の如く強し	モウパッサン著	5
肉體の悪魔	レイモン・ラディゲ著	3	は生きてゐる!	エルンスト・トラア著	2	色さんげ	モウパッサン著	3
英詩選	釋厨川白村著	4	結婚の悲劇	アルツイバシエフ著	5	初雪	モウパッサン著	3
平妖傳(上卷)	佐藤春夫譯	4	苦難の路(上)	アルツイバシエフ著	4	モツパッサン戯曲集	平野威馬雄譯	4
平妖傳(下卷)	佐藤春夫譯	4	苦難の路(下)	アルツイバシエフ著	4	ベルシヤ人の手紙	モンテスキエウ著	6
イブセン全集(卷一)	河野義典譯	3	戀愛詩集	生田春月著	5	小公子	パアネッ子著	2
イブセン全集(卷二)	長谷部孝譯	5	ルテツイア(第一)	ハインリッヒ・ハイネ著	5	作家論	テアネッ子著	4
イブセン全集(卷三)	仲木貞一譯	5	ルテツイア(第二)	ハインリッヒ・ハイネ著	5	ドストエフスキー論	秋田滋著	5
イブセン全集(卷四)	仲木貞一譯	5	ルテツイア(第三)	ハインリッヒ・ハイネ著	5	背徳者	石川淳著	2
イブセン全集(卷五)	大關啓郎譯	5	ルテツイア(第四)	ハインリッヒ・ハイネ著	5	蕩兒歸る	安德里・シイド著	2
聖書物語(舊約)	ヴァン・ルーネ著	3	回想・告白	ハインリッヒ・ハイネ著	4	戀をしてみて	安德里・シイド著	2
聖書物語(新約)	ヴァン・ルーネ著	3	魔	蔵原惟人譯	3	法王廢の拔穴	安德里・シイド著	6
洋服箏篋	トマス・マン著	2	現代	男梅田寛著	5	ホムブルグの公子	クライスト著	5
オク家の人々(一)	吉良良吉著	4						

新編シラー詩抄	幼年時代(下)	幼年時代(上)	ミルゴロド	憂鬱	不用人の一生	隨筆	回	エゴール	カチエ	伊太利物語	日記の中から	私の大學・番人	間であつた人々	敵・子供	ヘルマン戦争	タイン家の人々
小栗孝則著	上田進著	上田進著	平井キイ著	袋井キイ著	上田進著	上田進著	外村史郎著	杉本良吉著	中村白葉著	平井キイ著	湯浅芳子著	織原惟人著	堀野修著	堀野修著	堀野修著	堀野修著
8	6	4	4	4	6	4	5	3	3	5	4	6	4	6	5	6

静かなドン	静かなドン	静かなドン	小鳥を友として	異性は招く	父と子	うき草	チロルの谷間	父と子	ロビンソン物語	闘の力・生ける屍	戦争と平和	密	潜水艇乗組員	私は愛す
上田進著	上田進著	上田進著	ウイリアム・ハドソン著	菊池武一著	ツルゲーネフ著	二葉亭四迷著	D.H.ロレンス著	ツルゲーネフ著	梅田實著	昇田實著	梅田實著	平井キイ著	中野実著	アグアエニコ著
6	4	4	5	3	5	4	4	4	4	4	8	3	2	3

巴里の胃袋(下巻)	巴里の胃袋(上巻)	阿片溺愛者の告白	フアピアン	フアピアン	美しき青春	風物帖	紅玉	ライン牧歌譜	断鴻零雁記	サランボオ	サランボオ	プチブルジョア	プチブルジョア	人間嫌ひ
武林無根庵著	武林無根庵著	デ・クインシー著	ケストネル著	ケストネル著	植村敏夫著	佐藤新一著	石中象治著	シュミット著	飯塚朝暉著	神戶孝著	神戶孝著	芳澤光治著	芳澤光治著	モリエール著
4	5	2	3	4	5	5	5	4	4	4	4	4	6	5

クヘンフリートの手記	薄命の	薄命の	薄命の	悪魔の酒	悪魔の酒	劇作法	劇作法	ピノチ	決闘	決闘	智慧の悲しみ	情	蔵術の限界	ふるさと紀行	カムチャツカ紀行	死の勝利
谷崎精二著	内多精一著	内多精一著	内多精一著	エテ・ア・ホフマン著	エテ・ア・ホフマン著	末吉寛著	末吉寛著	佐藤春夫著	梅田實著	梅田實著	グリボーエドワ著	スチーフアン・ツワイック著	佐藤正彰著	ヘルマン・ヘッセ著	中垣虎児郎著	原田謙次著
5	5	4	4	5	5	4	5	5	5	5	3	3	5	5	5	5

不安の概念	文藝復興	近代文學の意味	アメリカ文學史要	浪漫主義	浪漫主義	浪漫主義	街の風景
伊藤郷一著	田部重治著	J.A.シモンツ著	ウァン・ドレン著	崔ビツ著	崔ビツ著	崔ビツ著	エルマ・ライス著
6	5	4	3	6	6	3	4

最新刊書目

古事記傳第二冊	本居宣長著 風卷景次郎校註	6	戦争と平和第一冊	梅田寛著 トルストイ著	8
新萬葉集略解(一)	橋本千蔭著 森本健吉校註	6	悪魔の酒(下)	エ・テ・ア・ホフマン著 濱野修譯	5
現代語源氏物語第四冊	窪田空穂譯	5	二重の誤解他數篇	プロスペリ・メリノー著 江口清譯	4
拾遺愚草(二)	藤原定家著 佐佐木信綱校註	5	モーパッサン戯曲集	平野威馬雄譯	4
宇治拾遺物語(下)	中島悅治校註	6	ボオドレエル傳	セシエ、ベルトオ共著 齋藤磯雄譯	5
老子の研究(上)序說	武内義雄著	5	サー・ロージー物語	ア・デイスン、ステイル共著 清見利彦譯	3
老子の研究(下)道徳經析義	武内義雄著	4	アメリカ文學史要	ヴァン・ドールン著 中柴光泰譯	3
改訂哲學概論	桑木嚴翼著	5	精神科學の論理	J・S・ミル著 松浦孝作譯	5
科學概論	J・トムソン著 内山賢次譯	5	通貨調節論(下)	J・フライトン著 阿野季房譯	5
人間の美的教育について	フリードリヒ・シラー著 島村教次譯	4	國民經濟學體系(上)	フリードリヒ・リスト著 谷口吉彦・正木一夫共譯	6

